

第Ⅵ章 ま と め

1 遺 構

調査区における遺構密度は低い。検出された遺構のほとんどは14 I・15 I・14 J・15 Jに位置し、確認面の標高は2.25～2.40mを示す。調査区全体をみると1.80～2.50mであることから、周辺に比べてやや微高地状を呈する部分に遺構が集中していることになる。13 J～14 Jをはじめ炭化物の層が薄く広がる地点が数か所散在していることから、この辺りは湿地に近い環境であったことが伺える。

遺構覆土の堆積状況を見ると、SK 7・13では黒色粘土と灰色粘土がブロック状になっており、自然に埋没したのではなく、意図的に埋められたものと推測される。なお、建物跡を構成するピットは確認できなかった。

2 遺 物

A 年 代

器種ごとの集計は行っていないため具体的な数値は不明であるが、食膳具よりも煮炊具の比率が高い。中でも長甕の割合が高く、小甕・鍋が続く。食膳具の中では須恵器無台杯が圧倒的に多く、産地では小泊産が過半数を占めている。

須恵器無台杯を資料として川口乙遺跡の年代を見てみたい。ここでは寺道上遺跡〔渡邊ほか2001〕の分類・成果をもとに考えていきたい。無台杯の口径が13.0cm以上をⅠ類、12.0cm前後をⅡ類とする。新津産無台杯はⅠ類（8）・Ⅱ類（7・37）とも確認できる。佐渡小泊産須恵器は口径10.5cmのものもあるが、ほぼⅡ類（38～42・45）でⅠ類は見られない。佐渡小泊産須恵器の編年は下口沢→カメ畑→江ノ下となっている。川口乙遺跡ではⅠ類が見られないということからするとカメ畑窯跡段階以外の下口沢窯跡段階・江ノ下窯跡段階が考えられるが、Ⅱ類は各段階を通して生産されている法量であり、時期を特定するのは難しい。そこで、他器種に目を向けると底径13cm程の有台杯Ⅰ類に伴う口径14.0cmの杯蓋Ⅰ類が認められた。下口沢窯跡では杯蓋Ⅰ類の口径は14.5～16.2cm、江ノ下窯跡では12.2～12.5cm、13.4～14.4cmのものが確認されている。この杯蓋Ⅰ類を考慮にいと、川口乙遺跡の杯蓋は江ノ下段階のものに比定可能かもしれない。新津丘陵では下口沢窯跡新段階の9世紀中頃には土師器生産が始まり、周辺の消費地では江ノ下窯跡段階では既に土師器食膳具が主体を占める。佐渡小泊産の無台杯Ⅰ類が見られないのが気になるが、食膳具における須恵器と土師器の割合から判断すると、川口乙遺跡の時期は新津で土師器食膳具が主体を占めるに至らない9世紀後半のカメ畑窯跡段階を中心とし、杯蓋Ⅰ類から江ノ下窯跡段階も若干含む時期としたい。

B 折縁杯について

折縁杯が明確に認識されたのは山三賀Ⅱ遺跡である〔坂井ほか1989〕。その折縁杯について近年、水澤幸一氏は「沼垂郡の8世紀第4四半期以降の窯のほとんどと、蒲原郡の滝谷窯で焼かれている。ただし新津丘陵での生産は、隣接する七本松窯や草水窯では認められない」としている〔水澤2001〕。この折縁杯は整理

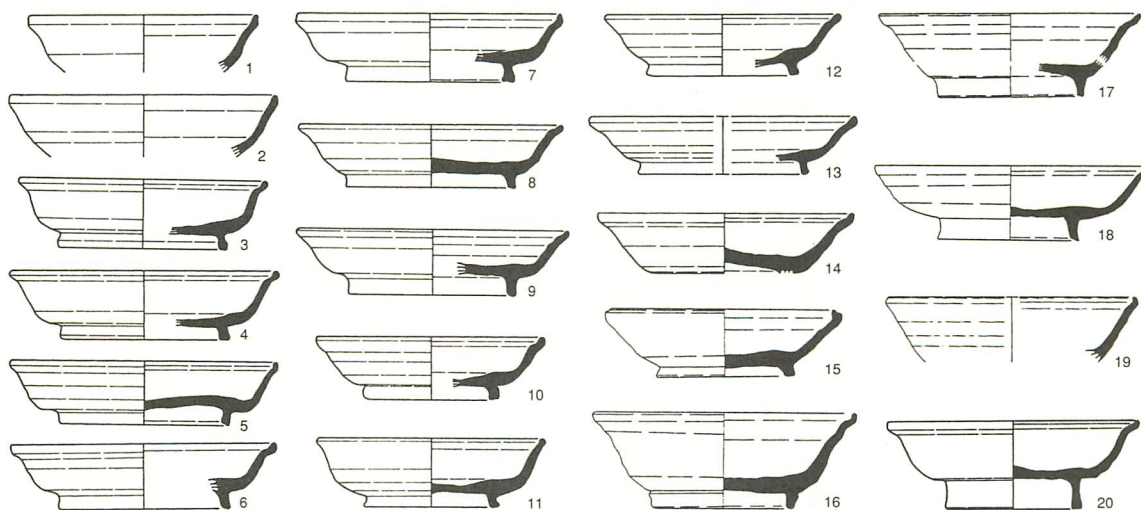
作業の始まった草水町2丁目窯跡でも生産されていたことが確認され、新津丘陵での生産が滝谷窯跡に限られたものではないことがわかった^{注1)}。そこで、新津丘陵における折縁杯の生産や蒲原郡の消費遺跡について出土例を集めた。

生産地である草水町2丁目窯跡では図示したのは2点(1・2)であるが、今のところ須恵器窯灰原上層から4点が確認できる。1・2は口縁部の屈曲が弱いが、強いものも見られる。春日氏の御教示によると草水町2丁目窯跡灰原上層の年代は8世紀第4四半期である。滝谷窯跡では7点(3～9)が採集され〔川上ほか1989〕、隣接する七本松2号窯跡でも図示はしていないが口縁部の小破片が2点採集されている。滝谷窯跡の3～5は還元炎焼成、6～9は酸化炎焼成である。3・4は口縁部の外反、端部の折り返しが明瞭であるが、6以外の酸化炎焼成のものは口縁部の作りが曖昧である。時期差によるものかもしれない。5は焼き歪みが大きい。春日氏によると9世紀第3～4四半期に相当するとされている。

蒲原郡内の消費地としては以下の4遺跡が確認できた。上浦A遺跡〔川上1997〕ではSD16(10)・SD15(11)・SK5(12)・包含層(13)から出土している。4点とも阿賀北産とみられる。年代は9世紀第2四半期に比定されている〔渡邊ほか2001〕。加茂市鬼倉遺跡河川③区〔伊藤2001〕からは1点(14)が出土しており、阿賀北産である。年代は9世紀初頭から中頃とされている。新潟市小丸山遺跡SE7〔藤塚ほか1987〕からは浅身のもの(15)と深身のもの(16)、17は包含層出土、18は確認調査によるものである。年代は9世紀中頃に位置付けられている〔新潟市1994〕。新津市中谷内遺跡河1上層〔立木1999〕からも阿賀北産が1点(19)出土している。年代は9世紀第4四半期から10世紀前葉に比定されている。底部を欠く破片であるが深身である。川口乙遺跡包含層からは酸化炎焼成された新津産が1点(20)出土している。高めの高台が付く。

蒲原郡の消費地では中条町中倉遺跡〔水澤1999〕のようにまとまった個体数が出土することは極めて稀で、1遺跡1・2点が確認できるのみである。それもほとんどが阿賀北で生産されたものであり、新津丘陵産は川口乙遺跡だけである。新津丘陵では草水町2丁目窯・滝谷窯・七本松2号窯で生産されていたことは確認できたが、製品としてどの程度広まっていたかは不明である。また、量的にも郡を越えて分布している沼垂郡産に比較して極少量であったことが窺える。

注1) 1993年本調査、2005年3月報告書刊行予定。



第6図 蒲原郡出土の折縁杯 (S=1/4)